

(14)

氏名(生年月日)	ミツ 光	ナガ 永	アツシ 篤
本籍			
学位の種類	医学博士		
学位授与の番号	乙第940号		
学位授与の日付	昭和63年5月20日		
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)		
学位論文題目	超音波内視鏡による上部消化管粘膜下腫瘍の診断		
論文審査委員	(主査) 教授 小幡 裕		
	(副査) 教授 羽生富士夫, 教授 串田つゆ香		

論文内要の要旨

目的

上部消化管の粘膜下腫瘍は、消化管内腔に突出した隆起で、消化管 X 線あるいは内視鏡検査により、bridging fold の有無、呼吸あるいは体位による移動性などによって診断される。しかし、これによっても粘膜下腫瘍と壁外性臓器あるいは他臓器腫瘍による圧迫との鑑別に困難を感じることも少なくない。さらに粘膜下腫瘍と診断されたとしても、その質的診断には限界がある。そこで、粘膜下腫瘍と壁外性圧迫との鑑別および質的診断を目的として超音波内視鏡 (EUS) を施行した成績について述べる。

対象および方法

対象は X 線あるいは内視鏡検査で消化管粘膜下腫瘍と診断された46症例である。また、EUS により粘膜下腫瘍と診断されたものに対しては、生検あるいは手術切除標本について病理学的に検索した。

成績

1. 粘膜下腫瘍と壁外性圧迫との鑑別：EUS により消化管壁構造と腫瘍との関係を明瞭に描出することによって容易であった。すなわち、胃の壁構造は5層構造として描出されるが、この内、漿膜層に対し腫瘍が内側にあるか外側にあるかによって鑑別された。これにより、X 線あるいは内視鏡検査で粘膜下腫瘍とみなされた46例のうち10例が壁外性圧迫であった。

2. 粘膜下腫瘍

A. 平滑筋腫および平滑筋肉腫：筋原性腫瘍は第4層 (PM 層) との連続性を有する腫瘍として描出され、内部エコーレベルは筋層と同じかそれよりもやや高

い。腫瘍が大きくなると内部エコーのムラが強くなる傾向が認められたが、内部エコーと良・悪性所見とは必ずしも相関しなかった。EUS により測定した腫瘍最大径が4cm 以上のものに高率に平滑筋肉腫が認められた。

B. 迷入腺：第3層 (SM 層) あるいは第4層内に存在する境界不明瞭な腫瘍として描出された。腫瘍内部に spot 状の低エコー域を散在性に認め、平滑筋腫に比較しエコーレベルの高い腫瘍として観察された。

C. 脂肪腫：第3層内に存在する境界明瞭で内部エコー均一なエコーレベルの高い腫瘍として観察された。

D. 胃嚢腫：第3層内に存在する内部エコー無構造な腫瘤として描出された。

3. 壁外性圧迫：漿膜層を外側より圧排する腫瘤として描出され、腫瘍と肝・胆・膵・脾などの上部消化管周囲臓器との連続性を観察することにより、その発生源および性状を診断することが可能であった。

考察および結語

上部消化管粘膜下腫瘍例について EUS と病理組織学的所見とを対比し、EUS の診断的意義について検討した。その結果、従来の上部消化管 X 線や内視鏡検査では診断能に限界があり、EUS によって描出される胃壁構造との関連、エコー像の特徴などから、壁外壁内の鑑別、腫瘍の質的診断が可能であり、さらに治療法の決定にも役立つ情報が得られ、EUS は上部消化管粘膜下腫瘍の診断および病態の把握に極めて有用な検査法であることが明らかにされた。

論文審査の要旨

従来、上部消化管粘膜下腫瘍（SMT）の診断は消化管 X 線および内視鏡検査により行われていたが診断能に限界があった。

本論文は超音波内視鏡（EUS）による SMT の診断能を検討したもので、EUS により描出される腫瘍エコー像の特徴、胃壁構造との関係、などから質的診断、壁外壁内の鑑別が可能であることを明らかにしたものである。学術上価値ある論文と認める。

主論文公表誌

超音波内視鏡による上部消化管粘膜下腫瘍の診断
日本消化器内視鏡学会雑誌 第29巻 第1号
3～15頁（1987年1月20日発行）

副論文公表誌

- 1) 有機燐中毒により急性膵炎が惹起された2例
胆と肝 4 (5) 701～704 (1983)
- 2) 高齢者胃潰瘍に関する臨床的検討
消内視鏡の進歩 27 141～144 (1985)
- 3) コンゴーレッド変色帯がみられた橋本病を合併した悪性貧血の1例
日消内視鏡会誌 28 (10) 2339～2347 (1986)
- 4) Cronkhite-Canada 症候群3例の臨床検討
日消内視鏡会誌 29 (10) 2253～2262 (1987)
- 5) 拡大内視鏡による隆起型 ATP と IIa との鑑別
消内視鏡の進歩 31 38～41 (1987)